

# 世界の図書館 イギリス・ アイルランド編

- 1 「危機と市場」  
図書館長 尾上 修悟
- 2 研究ノートから  
国際裁判管轄の新立法 法学部 国際関係法学科 教授 多田 望  
ブラウジングルーム  
アラブ地域を理解する 経済学部 国際経済学科 教授 河村 朗
- 3-4 世界の図書館 イギリス・アイルランド編  
リーズ大学図書館 人間科学部 社会福祉学科 准教授 平 直子  
カーディフ大学図書館 文学部 外国語学科 英語専攻 教授 清宮 徹  
アイルランド国立図書館 文学部 英文学科 准教授 河原 真也
- 5-6 システムリプレイス②  
図書情報課 山下 大輔 坂本 里栄
- 7 蔵書ギャラリー no.14  
『絵巻 山中常盤』  
人間科学部 児童教育学科 教授 古田 雅憲

# 図書館報

SEINAN GAKUIN  
UNIVERSITY  
LIBRARY BULLETIN  
2012.October No.173



これまで、経済の分析において、市場はつねに王座の地位を占めてきた。(ブローデル[9])市場は、間違いなく慈しみ深い神と信じられ、A.スミスの説く「見えざる手」に導かれて自己調整能力を持つ、と考えられたのである。そして、市場がバブル化した1980年代に、市場を万能視する考えは、ついに宗教的な色彩さえ帯びる。(佐和[4])この市場主義の背後に、自由放任の思想があることは言うまでもない。それは、私的利益と公共善との間の神の摂理による調和として描かれた。適者生存を唱えるダーウィニズムが、この思想を他方で支えたことも否定できない。そこでは、自由競争が人間を作ったのであり、優勝劣敗こそが、市場ダイナミズムの源泉になるとみなされた。しかも、そうした市場は、完全に効率的なものと仮定され(完全市場仮説)、すべての情報は、市場価格に織り込まれる、と想定されたのである。(ブックスターバー[8])今日に至るまで、以上の事は果して正しい、と証明されたのであろうか。この点こそが問われねばならない。

市場の失敗は、今までくり返し現れた。その度に、市場主義者は、市場は制度設計の改善によってその機能をより完全なものにする、と主張した。しかし実際には、皮肉にも、そうした改善を行えば行うほど市場の機能不全は高まった。市場改善は、市場活動のスピードと複雑さを増すことで、自らを破滅に追いやるからである。そうだとすれば、むしろ完全市場仮説の不完全性が明らかにされた、と言ってよいであろう。そもそも、市場は、経済の一部でしかなく、その全部を表すものではない。(ブローデル[9])経済は、市場によって支配されている訳では決していないのである。それにも拘らず、市場経済の神話は、今なお消えていない。そこでは、市場に入り込むもののみが、値付けのできる交換価値として評価される。今や、あらゆるものが市場化されている、と言っても過言ではない。

一方、市場に参加するアクターはどうであろうか。かれらはすべて、誠実で利他心の旺盛な人々であったか。少なくとも、今日の一部のアクターが、そのような人々からほど遠い、否、かれらと全く逆の性格の持主であることに異を唱える人はいないであろう。そうしたアクターの中で、自由市場を舞台に、略奪的とも言える行為でスーパー・リッチに成り上がった新しいエリート群を見出すことができる。(エリオット、アトキンソン[1])かれらこそまさに、強欲と傲慢さの塊であった。もともとギリシャ語としての傲慢さは、神々に対する無礼な思い上がりを意味し、古代ギリシャでは犯罪に値した。ところが現代では逆に、自由市場思想が、新たなポピュリズムとして君臨し、人々は、強欲と傲慢さを正当化した。富の創出そのものが、人間性を破壊し荒廃させるのであ

れば、その富は、いくら大きなものであっても人間性の回復をもたらすのに十分ではないであろう。G.グリーンは、小説の中でこの点を鮮やかに描いている。(グリーン[3])

以上に見たような、市場の持つ本質的な欠陥が、重大危機を人類に及ぼしてきたとすれば、我々は、早急に、かつ根本的に、その改革に乗り出す必要がある。P.サミュエルソンはかつて、市場は心を持たないが、それを制御できれば適格に機能する、と述べた。(都留[6])確かに、市場はこれまで、他者によりコントロールされることを嫌ってきた。市場は、自身で管理できるとする考えが、アングロ・サクソン諸国で主張され、かつまた実践されたのである。しかし、今やそのことがまかり通るときではない。フランスを中心に強調されたように、野放しの市場はカオスであり、それは、国家によって秩序付けられねばならない。(尾上[2])近代以降の市民社会の核心理念は、社会から暴力的原理を完全に排除することにある。(竹田[5])現代の市場が、敗者を抹殺し、かれらと勝者との格差を無限に拡大させるのであれば、それは、暴力以外の何ものでもない。そこで、この暴力を公的に制御する装置となることを、近代国家は目指したはずであった。この点を明確に示したのが、G.W.F.ヘーゲルである。ヘーゲルは、近代国家の本質を、諸個人の幸福と公共性とか調和的に統一される点に見出す。彼の国家論の基本は、市民社会の自由競争を、人倫国家の原理、すなわち共同体的互酬の原理で調停することにある。(ヘーゲル[10])そこには、質的かつ量的に不平等にある人間の能力を、より平等なものにする願いが込められている。現代の市場主義は、この思想とは逆に、平等性を市場の錆とみなす。もし国家が、そうした不平等性を放置するのであれば、K.ボラニーが唱えたように、自己破壊のメカニズムの動きを和らげる対抗的な防衛行動を、人間社会を滅亡から救うためにとらざるをえないであろう。(ボラニー[11])

#### (参考文献)

- [1]ラリー・エリオット、ダン・アトキンソン、グリーン裕美、阪本章子訳「市場原理主義の害毒 イギリスからの眺め：世界経済・失敗の本質」PHP、2009年【開架3階 333/6/628】
- [2]尾上修悟「フランスとEUの金融ガヴァナンス：金融危機の克服に向けて」ミネルヴァ書房、2012年【開架3階 338/23/14C】
- [3]G.グリーン、丸谷丈一訳「負けた者がみな貰う」早川島房、2004年【開架4階 938/G2/1-11】
- [4]佐和隆光「市場主義の終焉：日本経済をどうするのか」岩波新書、2000年【開架2階 092/332/20】
- [5]竹田青嗣「人間の未来」ちくま新書、2009年
- [6]都留重人「市場には心が無い：成長なくて改革をこそ」岩波書店、2006年【開架3階 304/0/726】
- [7]ジャスティン・フォックス、遠藤真実訳「合理的な市場という神話：リスク、報酬、幻想をめぐるウォール街の歴史」東洋経済新報社、2010年【開架3階 338/253/97】
- [8]リチャード・ブックスターバー、遠藤真実訳「市場リスク暴落は必然か」日経BP社、2008年【開架3階 338/1/159B】
- [9]F.ブローデル、金塚貞文訳「歴史入門」太田出版、1995年【開架2階 201/0/89】
- [10]G.W.F.ヘーゲル、長谷川宏訳「法哲学講義」作品社、2000年【開架3階 321/1/214】
- [11]K.ボラニー、吉沢・野口・長尾・杉村訳「大転換：市場社会の形成と崩壊」東洋経済新報社、1975年【開架3階 332/0/74】



## 国際裁判管轄の新立法

法学部 国際関係法学科 教授 多田 望

今年(2012年)の4月に、国際売買契約に基づいて外国会社に物品の引渡しや損害賠償を求める等の国際取引事件に関して、日本の裁判所で訴訟ができるかどうかを決定する規定を新設する改正民事訴訟法等が施行された。この問題は国際裁判管轄の問題と呼ばれるが、最近の私は研究室で、この新立法に関わる論文等ばかり執筆している。新立法の解説本である、佐藤達文＝小林康彦編著『一問一答 平成23年民事訴訟法等改正一国際裁判管轄法制の整備一』商事法務、2012年[開架3階 327/2/468]を手元にしながら。

この法改正については、「日本の民事訴訟法には国際裁判管轄を定める規定はなかった」という前提とともに、「国際裁判管轄に関する規定が初めてできた」という説明がされる。「民訴法には国際裁判管轄の規定がない」とすることは日本の学者の通説であり、ほとんどの国際私法や国際民事訴訟法の本は、こう記している(国際私法や国際民事訴訟法の授業を受けた方は、このことを思い出して頂けるだろう)。そして通説は、日本の裁判所も同じ見解だと言う。しかし、「日本の民事訴訟法には国際裁判管轄の規定はなかった」というのは大きな誤りで、「民事訴訟法は制定の1890(明治23)年から国際裁判管轄の規定を有していた」というのが歴史的事実である。このことは、立法資料の調

査をもとに、藤田泰弘著『日/米国際訴訟の実務と論点』日本評論社、1998年、3頁以下[開架3階 329/87/57]など

により明らかにされている。同書は、「大隈重信卿が爆弾テロにより右足を失わなければならなかったのはなぜか」という問いかけのもとで、民訴法が国際裁判管轄を定めていたことを説得的に論証する(いや、論証するまでもない「事実」であるので、明瞭に指摘する、と言った方が正しいか)。

にもかかわらず、今回の法改正でも徹底して、「民訴法には国際裁判管轄の規定はなかった」との前提が貫かれる。通説は何故にかくも浅い主張に固執するのか。「民訴法は国際裁判管轄の条文も定めていた」という歴史的事実は、「今回の立法で条文が初めてできた」という一辺倒の解説で覆滅されてしまうのか。条文ができたので、国際裁判管轄はこれからはそれに従って判断されるという意味では、この議論は法の解釈論にとって役立つものでないかも知れない。しかし、今この時に、それでも再度改めて、正しい歴史認識を一研究として遺しておくことは、100年、1000年後の法学者のために、有益であると信じる。研究者として、再び、時間と気力と能力を賭けた挑戦が待っている。



## ブラウジングルーム

### アラブ地域を理解する

経済学部 国際経済学科 教授 河村 朗

アラブとはどのような地域でしょうか。そもそも、アラブ地域と中東地域を混同している人がいるかもしれませんが、同じではありません。中東はアラブと非アラブから構成され、アラビア語という共通の言語が使われているエジプト、イラク等はアラブ諸国ですが、イラン、トルコ等は非アラブ諸国です。

皆さんはアラブと聞いて何をイメージするでしょうか。最近アラブ諸国で起こっている民主化運動である「アラブの春」をイメージする人がいるかもしれません。この背景をテーマにした書物として、『アラブ革命はなぜ起きたか：デモグラフィーとデモクラシー』(注1)が挙げられます。



(出所：筆者撮影)

90年代初頭にエジプトのカイロに留学していたことがあります。この本を読んでいたら当時の人々のことを思い出しました。彼らの子どもたちが今回のエジプト政変の原動力の一部になったのかもしれない。

また、これ以外に「石油」、「イスラーム」、「暑い」、「砂漠」、「戦争」等をイメージする人もいでしょう。このようなイメージが間違っているわけではありませんが、ただそ

れらだけでアラブを理解したら誤解することになります。アラブは多様な世界です。例えば、アラブ地域には、サウジアラビア、クウェート等産油国が多いですが、レバノンのような非産油国もあります。アラブ諸国の人々の多くはイスラーム教徒ですが、レバノンやエジプトにはキリスト教徒がいます。UAE(アラブ首長国連邦)のドバイには室内の人工スキー場があります。気温が高い所にスキーという正反対の組み合わせ等に興味を持ち、3年のゼミのテーマの一つにドバイのことを最近取り上げています。サービス業が中心で治安が良いドバイは砂漠のなかの近代都市で、最近800メートル超の世界一のビル(ブルジュ・ハリーフア)も開業しました(写真参照)。なお、ドバイの事情については、『ドバイがクール：世界ナンバーワンずくめの楽園都市』(注2)をお勧めします。

ところで私の専門は中東経済ですが、そこで活動している主な人々はアラブ人です。経済を理解するためには、彼らの価値観や特性を知ることが重要です。『アラブ人の気質と性格：個人と集団を動かすもの』(注3)は学生時代から何度も読んだ本で、開架でこの本を見つけた時は旧友と再会した気分でした。彼らの考え方を理解することで、アラブを理解するための第一歩を踏み出してみませんか。

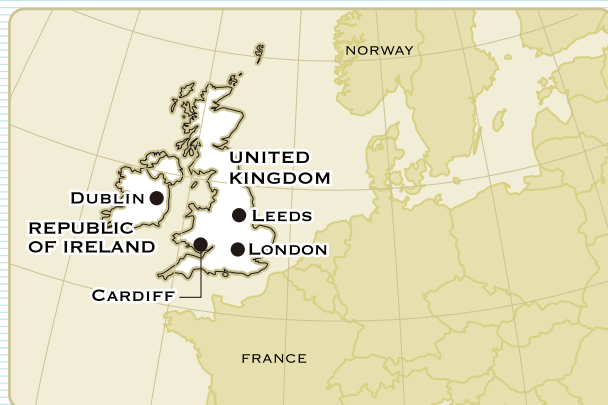
(注1) エマニュエル・トッド著、石崎晴己訳・解説『アラブ革命はなぜ起きたか：デモグラフィーとデモクラシー』藤原書店、2011[開架3階 312/28/11]

(注2) 横島公著『ドバイがクール：世界ナンバーワンずくめの楽園都市』三一書房、2006[開架2階 292/86/1]

(注3) サニア・ハマディ著、笠原佳雄訳『アラブ人の気質と性格：個人と集団を動かすもの』サイマル出版会、新版、1990[開架3階 361/42/38]

# 世界の図書館

[ イギリス・アイルランド編 ]



リーズ大学図書館

Leeds University Library : Leeds, LS2 9JT, UK  
<http://library.leeds.ac.uk/>

人間科学部 社会福祉学科 准教授 平直子

リーズ大学の図書館は、蔵書数280万冊で、オンラインブックも50万冊を超えており、英国内で第4番目の規模となっています。大学には、4つの図書館、約30の学部図書館があり、4,000席以上の閲覧席に加えて、グループ学習室、パソコン教室などが整備されており、データ収集などに関する講習会も行われます。また、図書館には貴重なコレクションがあり、シェイクスピアの最初の戯曲集で、英国文学史上最も重要な書物とも言われているファースト・フォリオ（1623年版。オークションで6～7億円で取引される本）もその中の一つです。

図書館の中でも、趣があるのがプロサートン図書館（Brotherton Library）です。リーズ大学のシンボルマークになっているパーキンソン・ビルディング（写真1）に入り口があり、IDカードをかざしてゲートを抜けると、重厚な雰囲気が漂う丸い空間が広がります。板張りの床には、放射状に机が並び、周りを20本ほどの柱が囲んでいます（写真2）。曇りや雨の日が多く、暗いイメージが強いのですが、晴れた日には天窓から明るい光が差し込みます。

図書館の利用システムが、日本とは違って面白かったので、紹介します。

まず、開館時間ですが、8:00～20:00が基本で、試験期間は24:00閉館です。ただ、平日の中でも金曜日は、1年を通して月～木曜日

より1～5時間早い閉館となっていました。

貸出期間は、本・雑誌により、「標準（学部生は2週間、大学院生は3か月）」「1週間」「1日」「ハイデマンド」の四種に分けられており、さらに「ハイデマンド」に関しては、「3日」と「4時間」(!)が、あります。「指定図書」の場合、同じ本が何冊も揃えてありますが、「標準」の本

は1-2冊。残りは「1週間」「3日」「4時間」になっていて、多くの人が確実に本を手に行けるシステムになっていました。なお、学部生は15冊、大学院生は25冊まで借りられます。

珍しかったのが、貸し出しのセルフサービスのシステムです。各自が、本のバーコードを機械にかざして手続きを行います。また、便利だったのが、webを通しての貸し出し更新システムです。「標準」「1週間」貸し出しの本の場合、希望者がいなければ、webから50回を上限として更新の手続きが可能です。

そして、意外だったのが、図書館でのグッズ販売です。一番の人気商品が、マナーの呼びかけも兼ねた「Sshhh...! Bag」です。7-8冊の本が入る麻の丈夫なバッグ（写真3）で、キャンパスで、よく目にしました。

卒業論文（dissertation）はもちろん、課題やレポート（essay）執筆のために多くの本を読まねばならないイギリスの大学生活。図書館のシステムも、そのニーズに合うものとなっており、大学教育の一面が見えてきます。



[写真1] パーキンソン・ビルディング



[写真2] プロサートン図書館 閲覧室



[写真3] 何種類もある「Sshhh...! バッグ」の1つ

[写真1,2提供:リーズ大学日本事務局beo(ビーイーオー)]



カーディフはウェールズ議会を持つウェールズの首都であり、イングランドとは異なる文化を大事にしています。その一つは言葉に表れ、ウェールズでは、英語とウェールズ語の2か国語の並列表記になっています。またカーディフは、先のロンドンオリンピックで、サッカー競技の会場として日本でも紹介された街です。イングランド国境に近く、ウェールズ人の割合は他のウェールズ地域に比べて低いものの、ウェールズとしての強いアイデンティティーを持つ街であります。カーディフ大学は、ウェールズ大学の一部であった時代もありますが、現在は独立し、ますます発展・進化を続けるウェールズの中で最も大きな大学です。その図書館なので、蔵書数を含め、とても大きな図書館といえるでしょう。大きな特徴は、分散化された図書館です。カーディフ大学の図書館は9つに分かれています。大学そのものが大きく、キャンパスが市の東側に広く配置されているため、それぞれのキャンパスが近くに図書館を持っているということです。したがって、自分たちが講義を受けているキャンパスから遠い中央図書館にわざわざ借りに行く必要がないということ。例えば私が在外研究に籍を置いた「カーディフ・ビジネススクール」には、その大学のビルディングのすぐ隣に、経済と経営関係の蔵書を中心とした「アバコンウェイ・ライブラリー」があり、経済や、金融、財務、経営などを学ぶ学生にとってはとても便利なシステムです。しかし半面、



〔図書館 外観〕



〔アバコンウェイ・ライブラリー入口〕

ビジネス系が中心の図書館であるため、例えば関連した社会学の書籍などが無い場合もあります。社会科学などを全般に「人文社会科学ライブラリー」が比較的近くのキャンパスでしたので、経済・ビジネスのライブラリーにないときは、隣のキャンパスで借りることが多くありました。便利な点は、違うライブラリーで借りても、返却は一つのところで済むことです。借りた図書館にわざわざ返却するという不便はありませんでした。

経済・ビジネスのライブラリーのもう一つの強みは、日本語の文献が多くあるという点です。じつはカーディフ・ビジネススクールの中に、日本研究センター(Cardiff Japanese Studies Centre)があり、そこで日本語教育も行われているため、日本語の文献と新聞などがそろっています(新聞の到着は実際より少し遅れています)。日本人研究者にとっては、とてもありがたい情報源でした。もうひとつ、カーディフ大学図書館の大きな特徴であり、便利なツールが、図書館司書とのチャットというものです。大学のネットワークにログインすると、司書の方とオンラインで対話が可能です。これは、課題や研究プロジェクトを抱える学生や研究者にとって、とても貴重なシステムといえます。

このようにカーディフ大学の図書館は、オンラインシステムの充実と分散する図書館の長所を生かし、ウェールズの知と情報の源泉となっています。

## アイルランド国立図書館

The National Library of Ireland : Kildare Street, Dublin 2, Ireland  
<http://www.nli.ie/>

小国ながらも、これまでノーベル文学賞受賞者を4名輩出したアイルランド。その文学的豊饒さを世界に誇る一方で、不動産バブルの崩壊による経済危機により、IMFとEUからの金融支援を受けたのはついこの間のことである。筆者が在外研究で滞在した2011年4月以降は、国家の緊縮財政のあおりを受け、大学への補助金が削減され、受け入れ先であったUniversity College Dublinの図書館の開館時間も大幅に短縮された。

今回紹介するのは、ジェイムズ・ジョイスの代表作『ユリシーズ』にも描写されたアイルランド国立図書館(National Library of Ireland)である。首都ダブリンの中心部にあるこの図書館の目玉は家系調査のための設備であろう。世界中にちらばるアイルランド系移民の子孫がこの国を訪問すると、ルート探しにここを訪れる。夏の観光シーズンともなると、系図調査室はデータベースで家系を調べる観光客でごったがえす。

アイルランド共和国の第一公用語はアイルランド語(ゲール語)である。国民の大部分が日常的に話す英語は第二公用語として憲法で規定され、交通標識や公文書など、すべてアイルランド語と英語で表記されている。国立図書館でも掲示板や申請書は2ヶ国語で書かれているため、外国からの訪問者は一瞬戸惑ってしまう。



〔図書館 外観〕



〔リーディングルーム〕

国立図書館のリーディング・ルームの天井はドーム型になっており、閲覧席につくと頭上の空間の広さに驚かされる。アイルランドの定期刊行物がほぼ揃っており、社会史的な調査を行う際、ここでのリサーチは欠かせない。スタッフも親切な館員が多く、大英図書館のような冷たさを感じさせないと言ったら言い過ぎであろうか。大学院生の頃、この図書館をアポなしで訪問したことがある。観光客は蔵書を閲覧できないと受付で断られたが、大学院でジョイスを研究し、20世紀のアイルランド史に興味があるとくいさがあると、「それなら、お前は研究者ではないか。入室の資格は十分だ」と言われ、パスポートの提示だけで1年間有効のリーダーズ・チケットを作成してくれたことがある。今夏、再訪した際も、この原稿のためにリーディング・ルームの撮影がしたいと言うとあっさり許可がおりた。アイルランドではこういう時に融通がきくことが多いと思う。

近年、国立図書館ではデジタル・アーカイブの整備に力を入れ始めている。ジョイスの草稿の収集にも熱心で、将来的にはオンライン上でかなりの数の草稿が閲覧できるという。文学関連イベントが多いのもこの特徴で、ポエトリー・リーディングが頻繁に行われている。詩人本人が自ら書いた一節を朗読し、聴衆とも語り合う場は研究者だけでなく、一般市民にとっても魅力的な場所だ。

# システム リプレイス

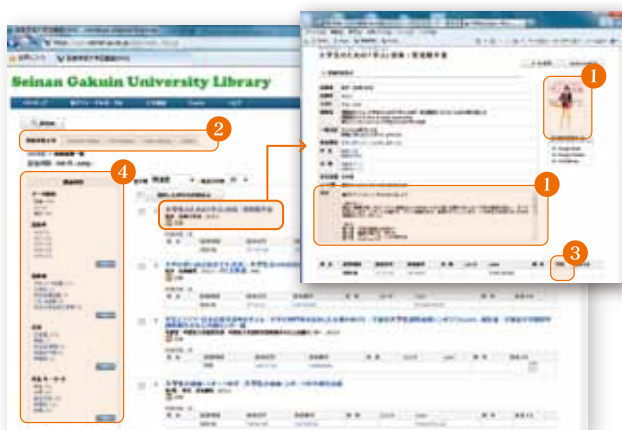
SYSTEM REPLACEMENT

## ②【新機能紹介】

図書情報課：山下 大輔 坂本 里栄

10月1日から新しい図書館システムが正式に稼動しました。今回はリプレイスにより特に便利になったOPACを中心に新機能についてご紹介いたします。

### OPAC



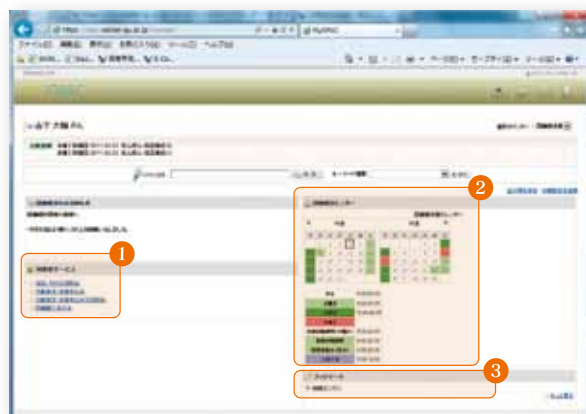
- ① Bookデータベースの導入により目次や表紙画像が表示されるようになり検索結果から多くの情報を得ることができるようになりました。
- ② タブの切替えによりCiNiiやJAIROなど外部の資料検索サイトをOPAC検索画面から検索することができるようになりました。
- ③ web上で資料の予約ができるようになりました。
- ④ ファセットブラウジング(検索結果の一覧画面上で、様々な条件を指定し、リアルタイムに絞り込みを行う機能)への対応やリンクリゾルバの導入により検索の利便性が向上しております。

※図書館ウェブサイトにはリンクがありますので、そちらからご利用ください。  
[https://opac.seinan-gu.ac.jp/opac/opac\\_search.cgi](https://opac.seinan-gu.ac.jp/opac/opac_search.cgi)  
 ※携帯版OPACも開始しました。以下のアドレスか、右のQRコードから!  
<https://opac.seinan-gu.ac.jp/iecats/>



### MyOPAC

MyOPACはウェブ上から各種手続きを行うことができる個人ページです。



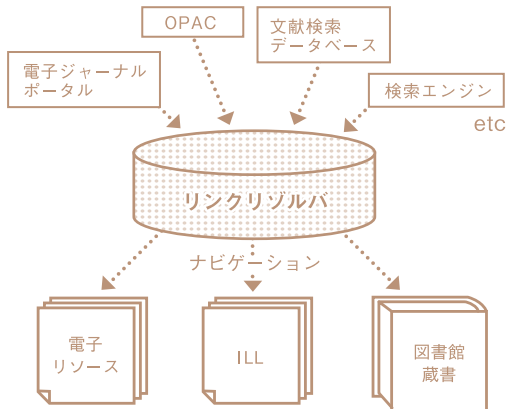
- ① 各種手続きがウェブ上で行えます。  
 貸出・予約状況照会: 状況の確認に加えて、貸出資料の延長を行うことができます。\*1  
 文献複写・貸借申込み: 本学に所蔵していない資料について、他大学等から取り寄せることができます。\*2
- ② 図書館カレンダーです。開館日の確認に利用してください。
- ③ ブックマーク: よく使うサイトやデータベースを登録できます。

\*1: 延滞している場合、予約が入っている場合は延長できません。また、返却期限日通知用メールを受け取る設定をしておく、返却日の1日前の10時にメールにてお知らせいたします。  
 \*2: 複写料、郵送料が発生いたしますのでご注意ください。

## 電子ジャーナルポータル・リンクリゾルバ

14,000タイトルを超える電子ジャーナルを活用するため、図書館では窓口として電子ジャーナルポータルを用意しています。電子ジャーナルポータルでは、本学で契約している電子ジャーナルを検索、利用することができます。新しいデータベースの導入も随時進めておりますのでご活用ください。

リンクリゾルバ概念図



### ■リンクリゾルバの概念のおさらい

今回のシステムリプレイスで導入されるリンクリゾルバは、文献検索データベースやOPACなどの検索結果を元に、文献そのものを手に入れるための道筋を示してくれる仕組みです。リンクリゾルバによって、これまでより簡単に最適な文献の入手方法に辿りつくことが出来るようになります。

前号でもご紹介しましたリンクリゾルバが新しく導入され、文献情報の検索から入手まで効率的に情報収集ができるようになりました。

リンクリゾルバは、各種データベース間のナビゲーションを行ってくれます。リンクリゾルバが導入されたことにより、電子ジャーナルポータルだけでなく各種データベースの検索結果からも図書館のOPACへのリンク、ILLの申込み、フリーテキストの検索等を行うことができるようになりました。



データベース(EBSCO、ProQuest等)で検索後、右のようなリンクリゾルバのボタンが表示された場合にクリックしてください。

360 Link to Full Text

- ① 論文タイトル、著者等の探している資料の情報が表示されます。
- ② 本学に契約しているオンラインジャーナルがある場合には、ここに表示されます。契約パッケージごとに表示されますので、必要な出版年が含まれるものを利用ください。
- ③ 図書館OPACへのリンクです。冊子資料を所蔵している場合がありますので、オンラインジャーナルが無い場合には、確認してみてください。
- ④ 著者所属組織の機関リポジトリ等で、インターネット上にフリーのテキストが存在している場合があります。②・③にて見つからない場合には、④のリンクから論文名等で確認してみてください。
- ⑤ ②～④にて発見できない場合には、他大学図書館から複写を取り寄せることができます。(有料) ⑤のリンクからお申し込みください。

## RefWorks



RefWorksは、自分に必要な様々な文献の管理を行うことができるサービスです。OPACの検索結果、文献データベース(CiNii等)の検索結果等を保存しておくことが出来ます。また、目的別のフォルダ管理、参考文献リストの作成、情報共有目的でのリストの作成等様々な目的で利用することが可能です。

様々な利用方法がありますので、自分なりの使い方を見つけてみてはいかがでしょうか。

利用には、登録が必要です。こちらから、登録をしてください。

<http://www.sunmedia.co.jp/e-port/refworks/download.html> (学内限定)

利用されていて必要な資料が見つからない場合等は、図書館カウンターまでお尋ねください。いつでも、職員がサポートさせていただきます。



## 『絵巻 山中常盤』

辻惟雄編 角川書店 1982【大型本 開架2階 721/2/58】



【図版1】常盤御前、悪命の介抱も空しく落命する。



【図版2】常盤御前、牛若の夢枕に立って仇討を乞う。



【図版3】牛若、宙を翔けて盗賊一味を打ち負かす。

本学着任後、意識的に「絵で楽しむ古典」を買い求めている。5年経ってそれなりのコレクションが揃いつつあるが、一方でなかなか入手しにくいものもある。今から30年前に限定版として出版された本書もその一つだった。昨年、それを某古書店の目録に見出した時は小躍りした。ちなみに九州の大学図書館では九州大・長崎大・別府大でしか見られない。

『山中常盤』とは、今年の大河ドラマ『平清盛』が描く時代の「母と子の物語」である。母＝平治合戦で敗死した源義朝の妻・常盤御前、子＝義朝の遺児・牛若丸（後の義経）が主人公だ。（時代劇では武井咲さんと神木隆之介君とが凛々しく演じている。）

そのあらすじ——時は源平合戦のさなか、奮る平家を討ち滅ぼすべく、15歳の牛若丸は立ち上がる。まずは奥州の雄・藤原秀衡と意を通ずるため、京・鞍馬寺を秘密裡に抜け出し平泉へ下った【表紙】。愛児の後を追って母常盤も東へ落ちてゆく。が、その途中、彼女は山中宿（現・関ヶ原町付近）で盗賊のために無残にも殺されてしまうのだった【図版1】。一方、平泉・秀衡邸の牛若は夢に現に現れる母の面影に不吉を覚えた【図版2】。やがて真相を知った彼は知略を巡らして母の仇を討つ【図版3】——。

後に源氏の大將として西へ向かう牛若の姿を描いて幕を下ろすこの作り物語は、江戸初期に「あやつり浄瑠璃」と呼ばれて流行った人形芝居の人気演目だった。その台本をそのまま詞書（ことばがき：場面の説明や人物の台詞を書いたもの）に用いつつ、全12巻・150冊の豪華絢爛たる絵巻物に仕立て上げたのが、「奇想の画家」とも称される\*1 岩佐又兵衛（1578-1650）とその弟子達だ。

手にとって頁を繰ってみると——そこに描かれた人々の

容貌がまず印象的だ。どの人物も、頬が不自然にふくらみ頤（あご）も異様に長い。「豊頬長頤（ほうきょうちょうい）」と呼ばれる又兵衛工房に特徴的な表現だ。美しいような醜いような、雅やかなような下品なような、善き人であるようなそうでないような、そういう危うい両面性をはらんだ人間たちが画面のあちらこちらに立ち居振る舞っている。

さらに画面の細部に目を凝らせば、高価な顔料を惜しげもなく用いた極彩色の中、凄まじいほど細やかな描線がうねる。たとえば、凶刃に倒れた常盤御前のみだれ髪だ【図版1】。噴き出す汗に濡れてみだれる髪一筋ひとすじが、愛児へ残す思いの深さを恐ろしいほどに物語る。「又兵衛はそうした曲線の妖しさに自覚的だった」との専門家の言には首肯するばかりだ\*2。

実は、又兵衛は織田信長の部将・荒木村重の子だった。父が主を裏切ったため、一族郎党600余名はことごとく処刑された——その中に又兵衛の母もいた。その折、たまたま落ち延びることを得た乳飲み子が、やがて奇想の画家・岩佐又兵衛として世に現れたのだ。

母の辞世——「残し置く そのみどり子の心こそ 思ひやられて 悲しかりけり」——『山中常盤』の絵巻とは、そのような画家が描いた「母と子の物語」である。

昨今、伊藤若冲、曾我蕭白、歌川国芳あたりの展覧会となると大盛況で、ともすれば行列して入場を待つのが当たり前などということもあるやに聞く。又兵衛もまたしかり。美術館に行く前に（また後にでも）、本学図書館に新たに架蔵した『絵巻 山中常盤』を手にとって、その「奇想」のほどに酔っていたら幸いである。

\*1: 辻惟雄著「奇想の系譜 又兵衛-国芳」美術出版社、1970

\*2: 辻惟雄著「岩佐又兵衛-浮世絵をつくった男の謎」文藝春秋、2008 【開架4階 721/8/68】